

教育における

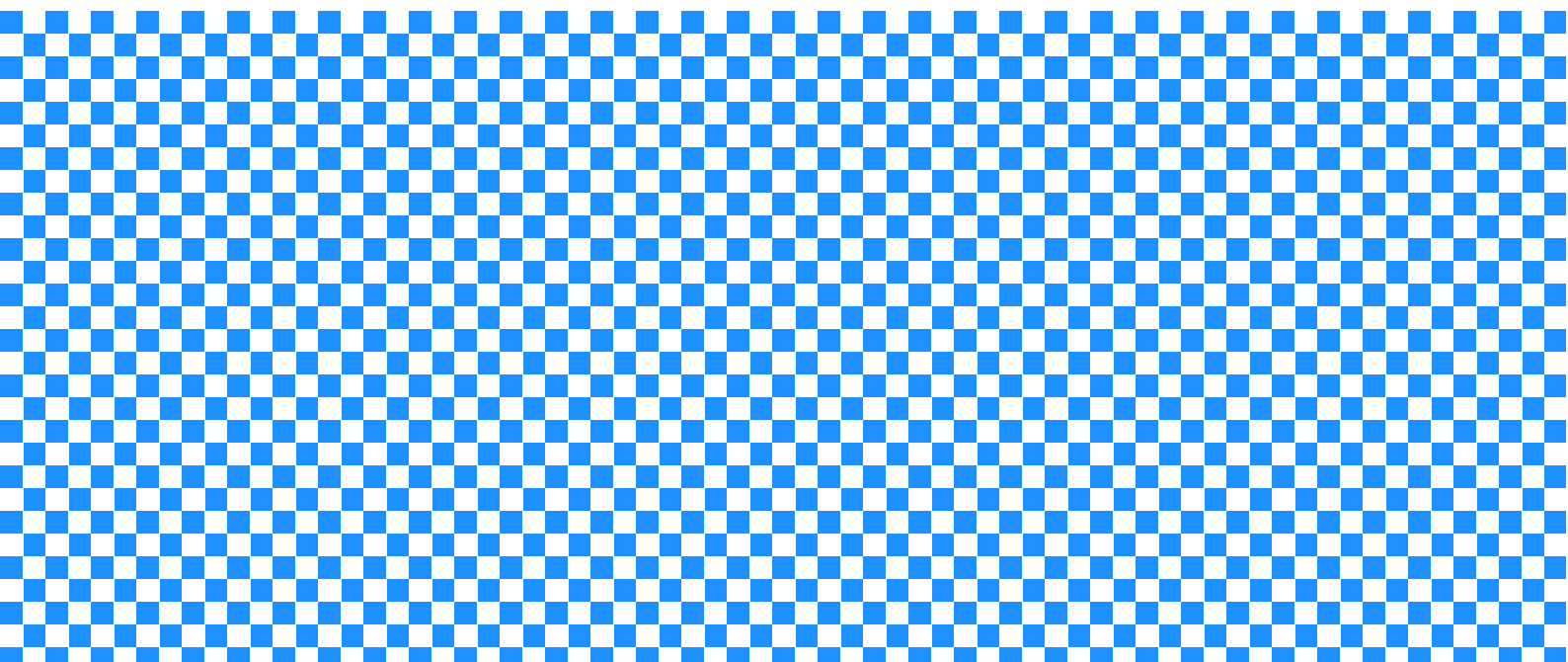
「豊かな体験」とは？

― 教育哲学からのアプローチ ―

Asai Kensuke

浅井 健介

奈良教育大学 学校教育講座(教育学)



教育における「豊かな体験」とは？

ー教育哲学からのアプローチー

奈良教育大学 学校教育講座（教育学） 浅井 健介

はじめに

みなさんは「教育哲学」と聞いて何を思い浮かべますか？「哲学」と聞いて、正解のない問題を無意味に考えつづけるあまり役に立たない学問を想像した人もいるかもしれません。しかし、よく考えてみると、私たちの日常は正解のない問いで溢れています。今日の夕食をどうするかといった些細な問いにすら正解はないですし、恋人とどのように付き合おうか、よい教育とは何か、どうしたら生徒が主体的に学んだことになるのかなど、挙げていけばきりがありません。もっとも日々の生活では、正解がないからといって立ち止まっているわけにはいきません。場の空気であれ、慣習であれ、個人の偏見であれ、私たちは普段から、分からないなりに何らかの考えに従って答えを出し、滞りなく行動しています。教育哲学とは、教育に関して自分たちが前提にしているその考えについて一度立ち止まって反省し、日々の慌ただしさの中で答えてしまっている問いに取り組み直そうとする試みといえるかもしれません。

このような問い直しをする際に、教育哲学が手がかりにするのは言葉です。例えば「子供の自主性が大事だ」と聞くとその通りだと思いますが、そのとき「自主性」という言葉で何を考えているのかは人によって違います。ほとんど「放任」に近いことを考えている人もいれば、自主性と教師による介入は矛盾しないと考える人もいます。だとすれば、「子供の自主性を尊重した教育」を行うにも、結局は「自主性」とは何かについての自分なりの考えや理解を深める作業が必要になります。そしてこの検討作業は、過去の熟練した教育実践家

や教育学者、哲学者といった人たちも通ってきた道です。自分自身の実践的関心を出発点にしつつ、自分がやり過ぎしてしまった問いに先人たちがどのように取り組んでいたのかを残された文献から読み解き、それと対話しながら自分なりの見解を確立していくところに、教育哲学の面白さがあります。

以下ではこの教育哲学のアプローチにより、私たちにとって比較的馴染みあると思われる問題について考えていきたいと思います。考察の対象とするのは、「豊かな体験」という誰もが当たり前のように知っている言葉です。死んだ知識の詰め込みだけではなく、生き生きとした豊かな体験が必要だと言われたら、なるほどその通りだと思うことでしょう。ゲームやスマホばかりいじっていないで外でもっと豊かな経験・体験をした方がいいと言われたことがある人もいられるかもしれません。しかし、「豊かな体験」とは何なのかを具体的に考え始めると、なかなか厄介です。現実の物事や人間と交わる機会を与えればそれで豊かな体験になるのか。オンラインでの交流は直接の交流体験に比べて豊かでないのか。体験すればそれで何かが身につくのか。オンライン化が急速に進み、オンライン空間が私たちの日常の一部を構成するようになったコロナ以後の社会では、それらの問いはなおさら避けて通れないように思われます。

以下では、私が研究対象としているヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）というドイツの思想家による議論を手がかりにしつつ、私たちが「豊かな体験」と考えているものの正体に迫ってみたいと思います。

1. 「豊かな体験」とは何か——歴史的背景から考える

教育のなかで私たちはなぜ「豊かな体験」を求めるのでしょうか。また、「豊かな体験」と言うときに私たちは何を考えているのでしょうか。本節では、ある文書の読解を通じて、体験についての私たちの考え（思想）がどのような歴史的な背景のなかで形作られてきたのかを明らかにしていきます。

その文書とは、1996年の中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に生きる力とゆとりを—」です。「中央教育審議会」（中教審）というのは、文部科学省が学習指導要領も含め教育政策の方針を打ち出す際、それに関する重要事項について調査・審議してもらうために召集する有識者会議です。そしてその審議の結果を受けて出される提言書

のことを「答申」といいます。今から読むこの 1996 年の答申は、中教審の答申のなかではじめて「生きる力」という言葉を使用したことで知られています（「生きる力」というのはそれまでの知識偏重の学力観に代わる新しい学力観です）。また、「体験的な学習活動」の充実化についての条文を新たに盛り込んだ 2001 年の学校教育法改正や、問題解決学習や体験学習を重視する「総合的な学習の時間」創設の契機にもなった答申です。その答申の一節を実際に読解することで、私たち自身が前提としている体験についての考えを浮かび上がらせていきたいと思います。

子供たちに「生きる力」をはぐくむためには、自然や社会の現実に触れる実際の体験が必要である〔……〕。子供たちは、具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころとして、感動したり、驚いたりしながら、「なぜ、どうして」と考えを深める中で、実際の生活や社会、自然の在り方を学んでいく。そして、そこで得た知識や考え方を基に、実生活の様々な課題に取り組むことを通じて、自らを高め、よりよい生活を創り出していくことができるのである。このように、体験は、子供たちの成長の糧であり、「生きる力」をはぐくむ基盤となっているのである。／しかしながら、〔……〕今日、子供たちは、直接体験が不足しているのが現状であり、子供たちに生活体験や自然体験などの体験活動の機会を豊かにすることは極めて重要な課題となっていると言わなければならない。こうした体験活動は、学校教育においても重視していくことはもちろんであるが、家庭や地域社会での活動を通じてなされることが本来自然の姿であり、かつ効果的である〔……〕。（中央教育審議会 1996、強調は浅井）

下線を引いた部分から確認していきます。まず分かることは、子供たちの学習の基盤ないし出発点になるものとして直接体験が捉えられているということです。私たちは直接体験を通じて実生活や実社会、自然の在り方について知り、そこで様々な疑問や問題意識を抱きます。そしてそれが出発点にあるからこそ、よりよく生きるために学びを役立てようという意欲が湧き、そこで学ぶ知識も実感が伴ったものになるわけです。しかし、その出発点になるはずの直接体験

の機会がめっきり減ってしまった、だから子供たちに体験の機会を提供できるような工夫が必要だという構成になっています。

ところで、なぜ直接体験の機会が減ってしまったのでしょうか。それを理解するにはもう少し補足が必要です。まず、この答申が出されたのは、ちょうど学校における詰め込み教育が社会問題となり、いわゆる「ゆとり教育」へと教育政策が方向転換していく時期でした。勉強に時間を取られてゆとりのない生活を送る子供たちには、実生活や実社会についての豊かな体験を送る暇などなかったのです。「ゆとり教育」における授業時数や授業内容の大幅削減、完全週休二日制の導入にはそれを改善しようというねらいがありました。

しかしよく考えてみると、実際に起きていたのは、ただ直接体験の機会を量的に増やせば解決できるような簡単な問題ではなかったことが明らかになります。つまり、この答申の見通しは少し甘かったのです。この点について詳しく見ていきましょう。上の引用の最後の一文には、「体験活動は〔……〕家庭や地域での活動を通じてなされることが本来自然の姿」であると書かれています。しかし実際のところ、高度経済成長を経た 1970 年代以降の日本では、家庭や地域での活動の質自体が大きく変わってしまっていました。子供が親の家業を継ぐのが当たり前の時代には、家庭や地域で働く大人たちの姿を見てその仕事を手伝えること（つまり家庭や地域で直接体験をすること）が、これからの自分の人生に直結する「生きた経験」を得ることにつながりました。そこでの経験と結びつけさえすれば、学校での学びは自分の生活や人生について考えることにつながったのです。しかし、親がサラリーマンとして会社に働きに出るのが一般的になると、子供たちは家庭や地域で大人が働いている姿を見て学ぶことが難しくなります。それどころか、家業を継ぐ必要がなく、将来自分がどんな職業に就きどんな生き方することになるのかも分からないため、家庭や地域でいくら直接体験をしようとも、以前のようにその体験を自分の人生を豊かにする「経験」にしていくことは容易ではありません。しかも、科学技術などの進歩に伴って社会自体が日々変化しているのであれば、なおさら自分の人生を思い描くことは困難でしょう。

以上から明らかになったのは、ただ直接体験の機会を増やしてもそのまま自分たちの人生や生活が豊かになるわけではないような時代に、私たちが生きて

いるということです。修学旅行や野外活動、文化祭など私たちの生活は素晴らしい体験の機会に溢れていますが、それらは別個の非日常的なイベントのまま終わってしまうことが多く、自分の人生に直結するような「経験」には簡単に組み込めません。そのような「経験」の基盤になってくれるような豊かな体験とはどのようにすれば可能になるのでしょうか。

2. 「豊かな体験」の条件とは？——ベンヤミン思想を手がかりに

素晴らしい体験は数多くするのにそれが人生経験にはなってくれない。上で指摘したそのような事態を見事に言い表したジョルジョ・アガンベン（1942-）というイタリアの哲学者の言葉の引用から、本節の議論を始めたいと思います。

現代人は、一日のうちで、種々雑多な出来事——気晴らしになる出来事や煩わしい出来事、めったにない出来事やありふれた出来事、辛い出来事や楽しい出来事——に出会い、くたくたになって夕方家に戻る。しかし、それらのうち、経験になるものはひとつとしてないのだ。／このように経験に翻訳することができないということこそが、今日——過去にはなかったほどまでに——日常生活を耐えがたいものになっているのであって、過去の生にくらべて、現代の生が質的に劣っているとか、無意味であるとかいったことが原因ではないのである（それどころか、おそらく今日ほど日常生活が有意味な出来事に満ちあふれていたことはかつてなかったといつてよい）。（アガンベン 2007、20-21 頁、強調は浅井）

これを読んでくださっている皆さんのなかには、代わり映えのしない毎日にうんざりしている人もいるかと思います。しかしよく考えてみると、私たちの周りでは、昔の田舎とは比べ物にならないほど多くの奇抜な出来事が起き、それに喜怒哀楽を感じています。それにもかかわらず毎日が代わり映えしないように感じるのは、意義深い出来事が起こらなくなったからでも直接体験の機会が減ったからでもなく、私たちがそれを経験に翻訳できなくなったからだと思います。では、私たちの周りで起こっている様々な出来事は、どうすれば「経験」の基盤になるような豊かな体験となるのでしょうか。

以下では、アガンベンもこの上の一節を書く際に参照しているドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンの議論を手がかりに、この問題について考えてみましょう。

この問題を考えるうえで参考になるのは、ベンヤミンが立てた「物語」と「情報」という二つの伝達形式の区別です。どちらも自分の身の回りに起きた出来事を他人に伝える伝達形式ですが、「物語」が語った内容を語り



ヴァルター・ベンヤミン

手や聞き手の経験に変えていくのに対し、「情報」はそのあとに何も残さない。

このことを説明するために、ベンヤミンは、ヘロドトス（前 484-?年）という古代ギリシャの歴史家が残したあるエジプト王の話为例に挙げ、そこには「物語」に必要な不可欠な要素が見られると指摘します。世界史選択の方はご存じかもしれませんが、ヘロドトスはのちに「歴史の父」と呼ばれるようになった歴史家で、主にペルシア戦争を題材にして、現地での自らの経験や関係者からの伝聞を『歴史』という書物にまとめました。またそれを聴衆に巧みに語り聞かせた天才的な物語作家であったと言われています。エジプト王の話もこの『歴史』に収録されている話の一つですが、その話とは次のようなものです。——エジプト王プサンメニトスが戦争でペルシアに負けて捕らえられたとき、勝利したペルシア王は、このエジプトの王様に屈辱を与えてやろうと企てます。しかし、勝利したペルシア軍が凱旋行進する道のわきに立たされても、自分の娘が召使いの格好で水汲みをさせられているのを見せつけられても、さらに処刑場への行列の中に自分の息子がいるのを目にしたときも、その光景を見て嘆き悲しむ他のエジプト人たちとは異なり、プサンメニトスだけは言葉なく、身じろぎもせず、じっと視線を地面に落としたまま立っていました。それにもかかわらず、その後、彼の召使いの一人である年老いたみすぼらしい男が捕虜となっているのを見たとき、彼は両の^{こぶし}拳で自分の頭を打ち、最も深い悲しみを表すあらゆる仕草を示したのです（cf. ベンヤミン 1996、296-297 頁）。

——なぜこのエジプトの王様は自分の愛する家族ではなく、ただの召使いの不幸を見たときに泣いたのでしょうか。日本にはまだ文字すらない遠い昔に書かれたこの短い逸話は、「悲しみ」についての不思議な出来事を含んでいます。この物語を聞いた人々は、まず、「なぜ？」と怪訝^{けげん}に思い、それから何かにつ

けふとこの話を思い出して反芻^{はんすう}していきます。そしてあるとき自分の身に起きたことや見聞きしたことを振り返っているうちに、突然この物語の意味が分かったと思う瞬間が何度かやってきます。そうして今度は、長年かけて自分自身の経験に同化されていったその物語を、自分の人生の教訓を添えつつ語り継いでいきたいという気持ちにさせるのです。このように物語の語り手は、非常に些末な体験ですらも自分の人生経験へと組み込んでいきます。

それに対して私たちが日々新聞やインターネットを介して触れる「情報」は——また学校の教科書から暗記しようとする「情報」は——、読んだそばから忘れてしまうような性質をもっています。ニュースのトップで流れて日本中を揺るがすような大事件でも同じです。知識として覚えていたとしても、そこには何の知恵も経験も残りません。何が違うのでしょうか。ベンヤミンは、「情報」の特徴として、「即時に検証可能」であり「それ自体で理解できるものとして現れることが最も重要」であることを挙げています（同書、295頁）。それ自体で理解できるということは新聞や学習参考書、情報誌にとっては不可欠です。それが正確かどうかの「検証」は必要であるにしても、私たちはその情報をもとに身近な出来事の判断をしたり、学校のテストに回答したりするからです。何が言いたいのか分からない情報や確かめようのない情報ほど迷惑なものはありません。しかし、それ自体で理解でき何の疑問も残らない分、情報は私たちの記憶からすぐに消え去り経験として残らないまま終わってしまいます。

これらを踏まえると、上のエジプト王についての逸話は「情報」として極めて不適切です。それが事実であるという証拠も示されていませんし、そもそも説明不足で、この王様の行動から何を読み取ればいいのかそれだけでは理解不能です。召使いの男へのわずかな同情がすでに溢れそうな悲しみの最後の一押しになったとも読めれば、それまで悲しみをせき止めていた極度の緊張状態がたまたまこの召使いを見て緩んだとも、あまりに親しい家族のことについては悲しむことすらできないとも、どのようにも読めてしまうのです。しかし、この説明のなきこそが、物語に不可欠な要素だとベンヤミンは言います。「ヘロドトスは何も説明しない。彼の報告はきわめてそっけない。だからこそ古代エジプトのこの話は、何千年を経た後にもなお、驚きと思索を呼び起こすことができるのだ」、と（同書、298頁）。つまり、出来事を説明から解き放たれた形

で受け取り、それをそのまま再現できるからこそ、その出来事に初めて直面したときの「なぜ、どうして」という新鮮さを持ち続け、人生のなかで何かを考えたり学んだりする際の出発点としてまた利用することができるのです。そのように説明から解放された体験こそが、前節の中教審答申が本来求めていた豊かで「具体的な体験」と言えるのではないのでしょうか。

おわりに

ベンヤミンが指摘した「情報」と「物語」という二つの伝達形式の区別を踏まえたとき、「豊かな体験」のためには体験をあれこれ説明してしまうのではなく、その驚きのままに受け取ることが重要であると分かりました。たとえ直接体験の機会を増やしても、それを受け取る側の私たちが「この体験は～のスキル獲得に役立つ」「地域の人の温もりの体験だ」などとあらかじめ意味づけ説明してしまっているのは、肝心の体験自体が私たちの記憶から消えていってしまいます。それは体験を「情報」として受け取る姿勢なのです。それに対して、「退屈とは、経験の卵をかえす夢の鳥だ」（同書、299 頁）と言うベンヤミンは、肩肘張らない精神的にリラックスした退屈状態こそが体験を豊かなものにしてくれると主張します。「ゆとり」と言ってもよいかもしれません。

ところで、「自主性」であれ「豊かな体験」であれ「教育」であれ、日々の慌ただしさのなかであれこれ自分に説明し理解してしまっている言葉が本来もっていた謎や違和感を、もう一度立ち止まって受け止め直そうとする教育哲学の試みにも同じことが言えるかもしれません。皆さんも一度立ち止まって、自分のなかにある経験の卵をかえしてみませんか？

参考文献

ジョルジョ・アガンベン（2007）『幼児期と歴史——経験の破壊と歴史の起源』（上村忠男訳）岩波書店。

ヴァルター・ベンヤミン（1996）『ベンヤミン・コレクション2 エッセイの思想』（浅井健二郎編訳）筑摩書房。

中央教育審議会（1996）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に生きる力とゆとりを一」（第一次答申、1996 年 7 月 19 日）。

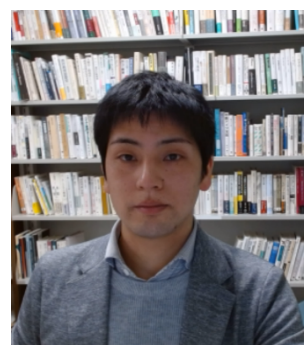
浅井 健介 (Asai Kensuke)

2015年 京都大学大学院 教育学研究科修士課程修了
(修士(教育学))

2018年 京都大学大学院 教育学研究科博士後期課程
研究指導認定

2020年 東大阪大学 短期大学部実践保育学科 非常勤講師

2021年 奈良教育大学 特任講師



【研究テーマ】

ベンヤミン思想をはじめとした現代思想の研究を通じて、〈教える - 学ぶ〉といった図式では捉えきれない「教育」という言葉の意味の深さや広がりについて考えています。特に、社会のなかで抑圧されているまだ言葉にもなっていないような声を教育学のなかでどのように扱うことができるのかということに関心があります。

【好きな映画】

『わたしを離さないで』。日本のテレビドラマ版ではなく、キャリー・マリガン主演の映画の方です。カズオ・イシグロによる原作小説も素晴らしいですが、映画版は小説とはちがう映画ならではの見せ方をしており、そこがとても好きです。何度見ても新しい発見があります。

『グッドモーニング、ベトナム』。チンタラー・スカパットという女優が演じるベトナム人少女が「パフ (Puff, The Magic Dragon)」という歌を口ずさむシーンが印象に残って忘れられなくなった映画です。ロビン・ウィリアムズ主演の映画で、一般的な戦争映画とは違う切り口で戦争や異文化交流について考えさせてくれます。

【今の研究分野を選択したきっかけ】

教室に限らない学校の外側の環境も含めて教育について考えたいと思っていただけ、教科教育学ではない教育学を学べる学部を選びました。入学後は当初マス・メディア論を扱う教育社会学系に進もうと思っていたのですが、図書館でたまたまタイトルだけを見て手に取った今井康雄『メディアの教育学』（2004年、東京大学出版会）という本を読んだことがきっかけで、教育思想史（教育哲学）という分野の面白さを知り、この分野に踏み込むことになりました。

【好きな小説】

灰谷健次郎『太陽の子』。小学生のときに初めて読んで以来、自分が教育についてもっと深く考えたいと思うきっかけの一つになった本です。

教育における「豊かな体験」とは？

－教育哲学からのアプローチ－

著者 あさい けんすけ
浅井 健介

2022年4月1日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9343 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>